

B型肝炎ワクチン、ご存知ですか？

昨年から子ども達のワクチンの数が増えて忙しくなりました。「ワクチンデビューは、生後2か月の誕生日」という掛け声で、生後2か月からヒブ・肺炎球菌ワクチンが始まり、最近ではロタウィルスワクチン（経口生ワクチン）も加わりました。生後3か月からはDPT（三種混合）も始まります。

このようにワクチンが増えてきたのは、「ワクチンで防げる病気（VPD）」を赤ちゃんから守って行こうという趣旨からです。

ワクチン後進国と言われて久しい日本ですが、もう一つ遅れているワクチンがあります。それがB型肝炎(HB)ワクチンです。

2007年現在、WHOに加盟している世界192か国中171か国（88%）がすべての子供にHBワクチンの投与を行っています。日本では、1986年からHBウィルスに感染している母親が出産した新生児、および医療従事者などごく一部の人に限られています。

B型肝炎(HB)はB型肝炎ウィルス(HBV)の感染によって起こる肝臓の病気です。成人の場合は、免疫力が強いので感染しても多くの場合無症状で治癒します。

(不顕性感染)しかし、20~30%の人は、急性肝炎となり、倦怠感、食欲不振、吐き気、黄疸などが発症します。そのうち2%が劇症肝炎となり致命的になります。

一方、3歳以下の子どもが感染した場合は、HBウィルスを体外へ排泄できず、キャリア化します。(ウィルスを体内に保有した状態)そして将来10~20%の人が慢性肝炎となり、肝硬変、そして肝がんへと移行していくのです。

非常に感染力が強いウィルスで、感染経路は母子感染(垂直感染)と父親や家族や

友人、輸血や性交渉などでの感染があります(水平感染)。しかし、特に子どもの場合には感染源が不明なことが多く、乳幼児の感染例が増えてきているようです。

世界的には約3億人がB型肝炎ウィルスに感染し、毎年約60万人が死亡しています。日本では130~150万人(約100人に1人)が感染している(HBキャリア)と推定されています。

現在、訴訟問題になっている慢性B型肝炎ですが、治療には難渋しています。やはり、病気を予防する一番の対策は、「予防接種」です。

世界の多くの国ではWHOの指示通りに定期接種になっており、生まれて1週間以内に1回目、2か月頃に2回目、6~12か月頃に3回目を接種しています。

日本では、2か月にヒブ・肺炎球菌・ロタウィルスが始まりますので、それに便乗してB型肝炎ワクチン(不活化ワクチン1回目)が推奨されています。4週後に2回目、その後20~24週経ってから3回目となります。生後3か月からでもその後でも開始できますが、感染予防という意味で早めに接種していた方が良いと思います。仮にHBキャリアの人が、HBワクチンを打っても特に副作用はありません。(たまなは)

